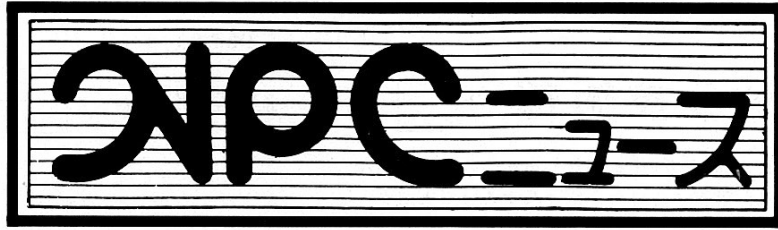




反省さえしっかりやれば、失敗は次なる成功の糧となる。逆にたとえ成功しても、先を見るあまりそれを一過性のものにしたなら、次の成功はおぼつかない。失敗しても焦らず反省を。成功しても地に足をつけ次の一步を。「回り道が近道のことがある」それが人生である。



—大分建設所—

# 大分LNG 竣工する

## —工事着工から3年9ヶ月、営業運転開始

〔10月4日=大分〕かねてより建設中の大分LNG基地(大分市青崎4番地1)は、このほど営業運転を開始し、10月4日に竣工式が行われました。

当基地の建設工事は、今年3月にはほぼ完了し、その後4月にオーストラリアからのタンカー第一船を迎えLNG燃料の受入れを始めるなど営業運転に向けて着々とその準備を整えていました。同工事のうち当社では、LNG

架構据付及び受入/払出配管工事、防災設備据付工事、制御装置設置工事他、各種電気・機械工事を担当し、無事故で終了しています。

竣工式は同基地敷地内で行われ、大分エル・エヌ・ジー(株)の深町社長、九州電力(株)の川合会長、IHIの岸野常務等関係各社の代表の方々に加え、地元選出の国会議員の先生方等も参列、当社からも久米社長が列席しました。

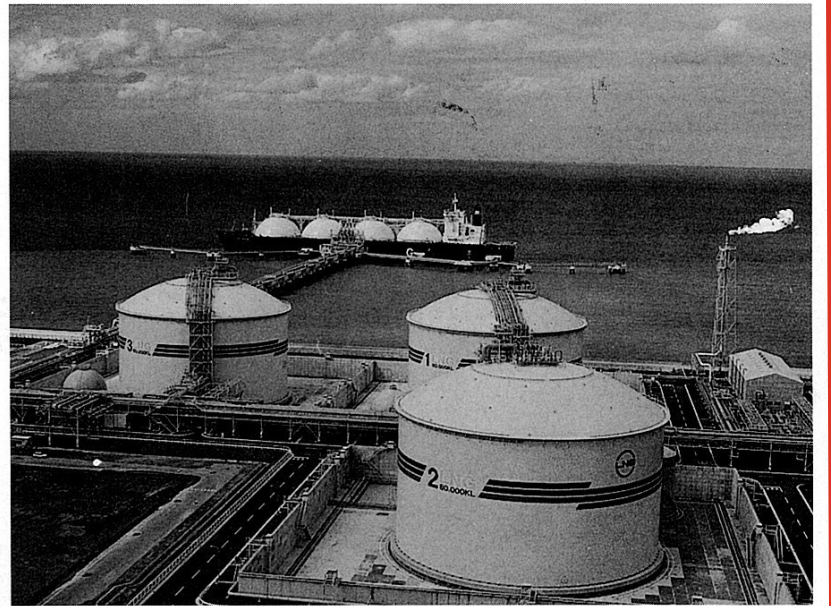
式では玉串奉奠などの神事に続き大分エル・エヌ・ジー(株)の深町社長から、関係各位への感謝の言葉が述べられ、各施工会社に対して感謝状が渡されました。

営業を開始した同基地は、8万

トンのLNGタンクを3基備え、隣接する九州電力(株)新大分発電所向けに燃料を供給するほか、一部は大分瓦斯(株)へもパイプラインで供給されます。

同基地からの燃料供給を受けて九州電力(株)新大分発電所はさる5月から1号系列が試運転を開始しています。

当社大分建設所の無災害記録も本年度末には連続1000日に到達する予定です。この記録はもとより、平成3年7月の運開まで完全無災害でやり抜く意気込みで所員一同頑張っています。



△大分エル・エヌ・ジー基地



△厳かにとり行われる神事

### — 表 彰 —

#### ○社外表彰

表彰月日	表 彰 元	受賞先	受 賞 内 容
H.2.9/12	原子力サービスエンジニアリング株式会社	当 社	○感謝状 原子力発電設備の二次系定期点検工事における全員一致による災害防止(満6年間完全無災害)の努力に
H.2.10/4	大分エル・エヌ・ジー株式会社	当 社	○感謝状 大分LNG基地新設工事にあたっての貢献と尽力に対して

#### ○社内表彰

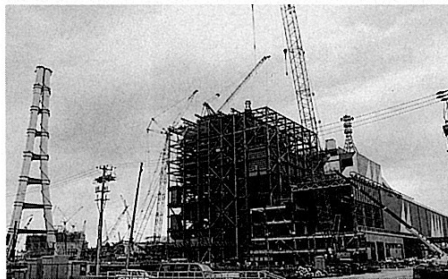
表彰月日	受 賞 先	受 賞 内 容
H.2.9/25	株式会社 九火	無災害記録賞第三種(90万時間)

### —社達・建設所の設置—

## 碧南建設所が開設 —碧南工事は碧南建設所2号作業所に

10月1日付で、碧南建設所(愛知県碧南市港南町2丁目8の2・中部電力(株)碧南火力建設事務所構内)が設置されました。これに伴い、碧南建設所3号作業所も設置され、従来の碧南工事は、名称を碧南建設所2号作業所と改められました。

碧南工事は本年5月1日に開設され、中部電力碧南火力発電所建設工事のうち、日立プラント建設(株)から2号機ボイラ関係の工事を受注し鋭意作業を進めていましたが、3号機関係の工事受注に伴い、体制を強化すべく今回の建設所設置・2号及び3号作業所の設置となったものです。



△建設中の碧南発電所

### || 随 想 ||

## 終戦記念日に思う

去る8月15日前後のTV番組で、太平洋戦争を扱った特集番組があり、その中で「戦艦大和」を取り上げたものが放映されていた。

私は、これを見ながら以前読んだことのある、QCに関連した本を思い出した。

「戦艦大和を造るような戦術思想が日本を敗戦に導いた。しかし戦艦大和を造り得た技術力が戦後の日本の復興を可能にさせた。日本の復興は、技術力×QC力であったことを知るべきである」と筆者がコメントされていた。昨今の企業間の新製品開発競争はし烈を極め、新製品の開発に当り「経営戦略」「要求品質」「技術力」の何れもが満足しなければヒット商品にはなり得ない。前述の戦艦

大和は、この内の「経営戦略」に欠けていたと言える。

それでは戦時のヒット商品と言えば、かの有名なゼロ戦が挙げられると思う。太平洋戦争の緒戦において連戦連勝を重ねたのは、ゼロ戦の活躍があったからこそである。このゼロ戦は「航続距離、速度、上昇力などいずれをとっても当時世界のどんな戦闘機の性能をも凌ぐもの」という要求のもとに三菱重工の堀越チームが寝食を忘れ悪戦苦闘の末に実現した、まさに夢の戦闘機である。無理難題を押し付けた海軍でさえ、出来上がった第1号機を見て脱帽したと言われている。

昭和15年、中国大陸戦線に出勤したゼロ戦は、初陣において12機



関西営業所長  
中野 文夫

をもって27機の中国戦闘機(ソ連製)を全機撃墜するという戦果を上げ、しかも往復2,000kmの距離を走破するという驚くべき性能を発揮した。当時アメリカは、中国在住の武官より本国へこれらの情報がレポートされていたが、「日本がそんな素晴らしい飛行機を作れるはずがない」と片付けられ、太平洋戦争の緒戦、日本に連勝を許すことになるのである。これは

まさに企業における情報伝達の稚拙さに通じるものがある。

「勝敗は時の運、名将と愚将との差は、勝った後・敗けた後の対処の仕方次第で定まる」——。連勝に酔った日本軍は、真剣な反省がなされていなかったと言われている。

一方、アメリカにおけるヒット商品と言えば、B-29が挙げられる。これもゼロ戦の場合と同様、当時の飛行理論ではとても不可能な「アリューシャン、フィリピンから日本を攻撃できる超大型爆撃機の開発」という要求に基づいて生まれたものであった。

この使命を与えられたB社(ボーイング社)とC社(コンソリデーター社)がこの難題に取組み、C社は厳しい要求に応えられず脱落し、B社が苦心の末開発したのが前述のB-29である。

同機の完成は日本への侵攻を速め、戦略爆撃隊として日本の都市

を灰燼にし、敗戦へと追込んだ。また、B社の積極的な取り組み姿勢が、戦後本格的航空輸送時代を迎えた時、同社の大型旅客機が世界の空を飛び回ることにつながったのはご承知のとおりである。

連勝に酔った日本が、ポストゼロ戦の開発に遅れ、結局太平洋戦争はゼロ戦で始まりB-29で終わったのである。

以上の大半は受け売りの話で恐縮であるが、我々はこの中で大いに学ぶべき点がある。中長期展望による経営戦略の確立、正確な情報収集と活用、経営状態の良い時も悪い時も、常に反省を怠らないこと、先輩の培った技術力の伝承とさらにそれらを改善し、難題に取組む闘志、工事に際して「安全管理」「品質管理」「工程管理」の何れが欠如しても客先のニーズには応えられないことを肝に銘じ、頑張りたいものである。